

国立公衆衛生院附属図書館



00018470

37.6.1

16477

N.H.B.

13

大正七、八年
大正八、九年

流行性感胃流行誌

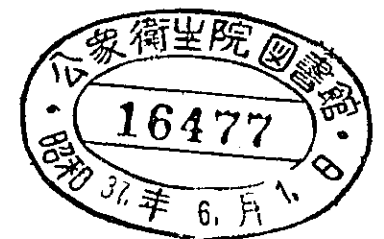
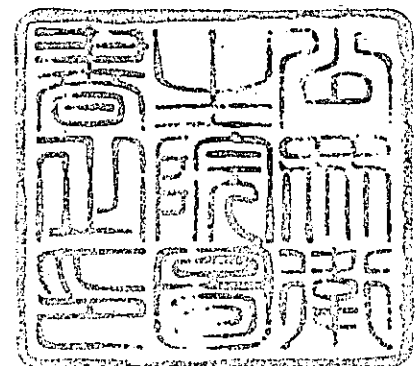
神奈川縣警察部衛生課

昭和六年六月一日
飯村保三氏
寄贈
公家書院

NHB
13

正誤表

頁	三二	九四	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
行	八	六	七	三	五	七	一八
誤	コ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
正	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ



目次

第一章 沿革……………一

第二章 外國ニ於ケル流行史……………二

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行……………五

第四章 神奈川縣ニ於ケル既往ノ流行……………一五

第五章 一九一八年ニ於ケル海外諸國ノ流行狀態……………二二

第六章 本邦ニ於ケル今回ノ流行……………三七

第七章 神奈川縣ニ於ケル今回ノ流行……………四六

第八章 流行性感胃ニ關スル統計的ニ三ノ觀察……………六四

第九章 豫防施設ノ概要……………七九

一、大正七年ニ於ケル對策……………八〇

 病原研索時代：消極的豫防時代

二、大正八年ニ於ケル對策……………八二

 「ワクチン」試用時代

三、大正八九年ニ於ケル對策……………八三

「ワクチン」應用時代

第十章 病原問題……………九四

第十一章 パイフェル氏菌感作「ワクチン」ノ應用ト其ノ成績……………一〇四

一、パイフェル氏菌感作「ワクチン」ノ製法……………一〇五

二、恢復患者血清凝集反應試驗……………一〇六

三、バ氏菌「ワクチン」ノ動物試驗……………一〇七

四、人體應用試驗及其ノ反應……………一一五

五、豫防注射ノ成績……………一二〇

第十二章 バ氏菌感作「ワクチン」ノ治療成績……………一三三

第十三章 總括……………一四四

附錄

流行性感胃ニ對スル豫防注射並ニ治療上ノ實驗

防疫官 北野 豊治 郎 述……………一四七

大正七八年
大正八九年

流行性感胃流行誌

神奈川縣衛生課

第一章 沿革

流行性ニ現ハル、「インフルエンザ」様疾患ニ關スル記載ハ、中世紀以來甚ダ多キモ「Grippe」グリッペナル名稱ヲ與ヘタルハ西曆一七四三年ノ流行ニ屬ス。然シテ「Influenza」ナル語ハ一七六二年ニ同様ナル疾患ノ流行ニ際シテ名付ケタルモノニシテ「グリッペ」ト同意義ニ用キラレタリ。其後一八八九年ヨリ數年ニ亘ル世界的「パンデミー」ニ於テ「パイフェル氏ガ一八九二年本病々原トシテ、一種ノ小桿菌ヲ發見シ諸多ノ學者ノ研究ニヨリ、該菌ヲ以テ「インフルエンザ」ノ病原トシテ承認スルニ至レリ。然ルニ其後地方的限局的ニ流行ヲ來シテ「グリッペ」ト呼稱セララル、「インフルエンザ」様疾患ニ於テハ、細菌學上「パイフェル氏菌」ヲ檢出スルコト殆ンドナク、恰モ「バ氏菌」ハ消滅セルモノ、如クニシテ「パイフェル氏菌」ノ病原性ニ對スル疑問ヲ抱カシムルニ至レリ。

茲ニ於テ「インフルエンザ」ハ「パイフェル氏菌」ニヨリテ起リ短時日間ニ急劇ナル世界的流行性ヲ發揮スル一種特有ノ疾患ニシテ「エンデミツシユ、エビデミツシユ」ニ流行スル所謂「グリッペ」トハ特ニ區別セララルベキモノトナスノ見解ニ到達セリ。換言セバ「パンデミツシユ」ニ「インフルエンザ」ト「エンデミツシユ」ト「エビデミツシユ」トハ其ノ病原ヲ異ニスルモノトナセリ。

我が國ニ於テハ今ヲ去ル千餘年ノ昔貞觀年間以來咳嗽ヲ發スル疾病ノ流行ヲ記載スルモノアリテ、咳嗽、咳逆、咳逆疾又ハ「しはぶきやみ」ト稱シ、徳川時代ニハ風疾、風邪、はやり風ノ語ヲ見ルニ至レリ。明治二十三年春期ノ世界的「バンデミー」ニ初メテ流行性感胃ノ名稱ヲ用ヒタリト聞ケリ。往時病理觀念ノ進歩セザル時代ニ在リテハ、疾病ノ主徵候ヲ以テ疾病分類ノ標準トナシタルヨリ、咳嗽ヲ主症狀トナス疾患ノ流行性ニ多數人ヲ胃スモノハ、洋ノ東西ヲ問ハズ同一名稱ノ下ニ呼稱セラレタルガ如シ。サレバ「インフルエンザ」ノ流行ノ如キモ、百日咳ノ流行ト相混同シテ古文書ニ記載セラレタルモノアルハ、爭フベカラザル所ナリトス。例ヘバ弘治二年（西曆一五五〇）京師小兒憂咳逆而死亡甚多（雍州府誌、日本疾病史）ノ記事ノ如キハ、感冒流行ノ年次トナスモ、小兒科學叢書ニハ之ヲ以テ本邦ニ於ケル百日咳流行ノ嚆矢ナリト記セルガ如ク、又海外ニ於ケル流行ニ見ルモ、彼ノ一五七八年巴里ノ流行及ビ一七三二年—一七三三年ノ流行ノ如キ百日咳ノ疫學史上ニハ同症ノ「バンデミー」ノ年次トナスアリ、其他歐洲ニテハ一八三〇年（インフルエンザ「バンデミー」ノ年次以後百日咳ノ蔓延ヲ見タリト記スルガ如キ）「インフルエンザ」ノ流行ニハ常ニ百日咳ヲ伴フモノナリヤ、將又、同時ニ之ガ多少ノ流行ヲ見ルモノナリヤ、疑問ナキ能ハズ。是等ハ病理觀念ノ不確實ナル昔時ノ記錄ニ基ク誤リナルヲ以テ「グリツペ」又ハ「インフルエンザ」ノ流行ト見做シテ流行史ヲ記述セントス。

第二章 外國ニ於ケル流行史

諸種疾病ノ原因トシテノ感冒ニ關シテハ遠ク耶蘇紀元前ノ記錄ニ散見スレ共、太古ニ於ケル

所謂「インフルエンザ」ノ流行ニ就テハ、記載ナキヲ以テ是ヲ知ルニ由ナシ、現今見ルガ如キ「インフルエンザ」様症狀ヲ伴ヒシ疾病ノ最モ古キ流行ハ十二世紀年代ニアルモノ、如ク、爾來屢々猛威ヲ逞ウシテ歴史家及醫家ノ記述ニ上レリ。殊ニ一五八〇年ニ至リザリウス、ジーヘリウス二氏ノ記載ヲ經テ、大ニ其ノ傳播流行ノ跡ヲ明カニスルヲ得、佛人ザラント氏ハ一五一〇年ヨリ一七八〇年ニ至ル流行記事ヲ詳述シ、ヒルシユ氏ハ其ノ歴史地理的病理學ニ於テ更ニ細叙シタル以來、大ニ流行區域ヲ明ニスルヲ得タリ。試ニ其ノ著明ナルモノヲ舉ゲンニ、一五一〇年ニ於テハ伊太利全土ニ流行シ、一五五七年ニ於テハ土耳其、コンスタンチノープルニ發シテ歐羅巴全洲ヲ席捲シ、當時ハ就中小兒及老人ヲ侵スコト甚シカリシト云フ。又一五七八年ニ於テハ巴里ニ行ハレ、當時ノ症狀ハ咳嗽ノ發作反覆常ナク往々肺ノ出血ヲ來セシモノアリ。時人は「Quinte」ト呼ベリ。蓋シ「Quinte」ハ咳嗽ノ發作頻發シテ止マラザルノ意ナリ。

一五八〇年ノ流行ハ既往ニ於ケル「バンデミー」ノ擴大ナルモノニシテ、歐羅巴ノ大部分ヲ侵シテ、遂ニ亞非利加、亞細亞ニ傳播セリ。降ツテ十七世紀ニ及ンデ、一六七五年十一月波蘭及北獨逸ニ行ハレ、延イテ和蘭、獨逸、瑞西ニ傳播シ、十二月ニ入りテ英國ニ侵入セリ。翌年一六七六年巴里ニ入り、遂ニ佛國ヲ掠メ、伊太利ヨリ西班牙ニ波及シ、遠クアフリカ、アメリカニ飛ビ、就中ジャマイカ、プエルト、メキシコノ如キハ激甚ヲ極メタリ。十八世紀ニ入りテ一七二九年ヨリ一七三三年ノ數年間世界的流行ヲナセリ。即チ歐羅巴ノ東方露西亞ヨリ起リテ西漸シ、瑞典、獨逸、埃太利、匈牙利、英吉利、西、佛蘭西、伊太利、愛蘭ニ及ビ、遂ニ米國ニ波及セリ。我ガ日本ノ如キモ一七三〇年（享保十五年）風邪ノ流行ヲ見タル事實アリ。其ノ後一七四三年中央歐羅巴ニ流行シ、其ノ病勢殊ニ猖獗ニシテ當

時初メテ此ノ症ニ Grippe ノ名ヲ付セリト。

一七六二年ニ於テハ歐羅巴及印度ニ頗ル猖獗ヲ極メタリ。抑々インフルエンザナル名稱ハ此ノ時ニ初メテ該症ニ冠セラレタルモノトス。越テ一七八〇年ヨリ一七八三年ニ亘リテノ流行ハ區域ノ擴大ナル病勢ノ猛烈ナル殆ドん全世界ニ蔓延シ航海員ニシテ之ニ冒サレザリシモノ稀ナリト謂ヘリ。就中露西亞ベテルブルグノ如キハ暫時ニシテ四萬人ノ多キヲ冒セリト記セリ。次デ一七八八年、一七九九年ノ流行ヲ經テ十九世紀ニ入り一八〇〇乃至一八〇三年ニ亘リテ流行ヲ見タリ。殊ニ一八三〇年ヨリ一八三三年ニ於ケル流行ノ如キハ全世界ヲ席捲シ後述スルガ如ク我が日本ノ如キモコレガ慘害ヲ被リタル所ニシテ、近世ニ於ケル一大流行ノ記録ヲ作りタルモノトシテ特筆ニ値スルモノトス。

當時ノ流行ハ一二月ノ間ニ既ニ全露西亞ニ蔓延シ三月ニハ、ポーランド、ホヘミヤノ兩國、北獨逸、デンマルク、エヂプト、シリヤ等ニ波及シ四月ニハ埃太利、佛蘭西、英吉利、愛蘭等ノ諸國ニ流行ノ徵ヲ現ハシテコロル、ダルマチヤ、伊太利等ハ五月ニ其ノ來襲ニ委シ去ルノ狀況ナリ。又他ノ進路ヲ取リタルモノハ支那ニ始マリシモノ、如クマニラ、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、印度ニ其ノ暴威ヲ逞セリ。翌年後流行トシテ亦前記ノ經路ヲ取リテ蔓延セリ。其ノ後一八五八年前後ノ大流行ヲ經テ彼ノ疫學史上ニ有名ナル一八八九年ノ世界的「パンデミー」ニ到達セルモノニシテ爾來數年間「後流行」ヲ逞シ當時勃興セル細菌學ノ研究旺盛ノ期ニ會セルヲ以テ、學者之ガ病原ノ探究ニ努力セシモ遂ニ檢出スルコト能ハズシテ學說ノ喧々囂々裡ニ空シク初年ノ流行ヲ送リス。而シテ一八九二年バイフェルハベツクト共ニ其ノ「後流行」ト見ルベキモノニ於テ固有ノ小桿菌ヲ發見

シ之ヲ以ツテ「インフルエンザ」ノ病原トナシ諸學者亦是ヲ承認セル事前述セルガ如シ。

今當時ノ流行蔓延ノ概況ヲ述ベンニ、最初シベリヤ地方トムスクニ於テ初メテ該病ノ流行ヲ報ゼラレタルガ如シ。以來半ケ月ヲ經テ高加索地方ヨリセバストポール、モスコ一等ニ入り西漸シテウイルナ、ブスコ、リガニ波及シ十月下旬ニ至リテ首都ベテルベルグヲ席捲シ其ノ勢迅速ニシテ貴賤貧富ノ別ナク忽チ全人口ノ約三分ノ二ヲ冒シ病院ハ爲メニ患者收容ノ處置ニ困ジ、兵營、學校ノ如キハ其ノ慘害名狀スベカラザルモノアリト謂ヘリ。

十一月下旬ニハ更ニ西漸シテ獨逸伯林ヲ襲ヒ十二月ニ及ンデ全獨逸ヲ風靡シ次デ埃太利ニ入りバルカン半島ヲ席捲スルニ至レリ。一方佛蘭西ニ向ヘルモノハ病勢一層猛烈ニシテ劇場ノ中止トナリ巴里ノ繁榮モ之ガ爲メニ振ハズト記セリ。斯クノ如クシテ伊太利ニ入りスカンデナビヤ半島、英吉利等ニモ迅速ニ波及シ遂ニ全歐洲ヲ風靡スルニ至レリ。一般ニ之レヲ Russian Influenza ト稱セリ。更ニ流行ノ餘波ハ遠ク大西洋ヲ橫斷シテ十二月中旬ニハ北米合衆國ヲ襲ヒ蔓延極メテ迅速ニシテ翌年(一八九〇)一月メキシコニ侵入シ二月(明治二十三年)ニハ我が日本ニモ侵入ヲ來シ、茲ニ所謂世界的「パンデミー」トシテ將又該病々原ノ發見トシテ疫學史上並ニ細菌學上一大記録ヲ殘シテ終熄セルモノトス。爾來二十有餘年ヲ經テ今次ノ世界的流行ニ到達セリ。

第三章 本邦ニ於ケル既往ノ流行

「インフルエンザ」様疾患ノ本邦ニ存在セルヤ否ヤニ關シテハ確ナル記載ナキヲ以テ詳カナラザレ共平安朝以後ノ記録ニ前述セル如ク咳病、咳逆(はぶきやみ)ト呼ビナセル主トシテ咳嗽ヲ



發スル疾病ノ流行セシハ明カナル事實ナリ。此ノ咳病流行ヲ以テ直チニ今日ノ「インフルエンザ」ト見做ス能ハザルハ既ニ記述セル所ナリトス。然レドモ其ノ症狀ノ上ヨリ或ハ流行傳播ノ狀態等ヨリ觀察シテ「インフルエンザ」ト推定セラル、點ナキニアラズ。日本災異志稿、日本疾病史等ヲ見ルニ同病ノ起原ニ關シテハ歐洲ニ於ケル流行記録ヨリ數世紀上古ニアルモノ、如ク、貞觀四年(西曆八六二)以來咳逆病ノ流行ト見做スベキモノ數十回ニ及ビ其ノ内ニ海外ヨリ傳播セリト稱セラル、モノ亦少カラズ。貞觀十四年(西曆八七二)ニ於ケル流行ノ如キハ時人之ヲ物海ノ客ガ毒氣ヲ齎シテ傳播セリト謂ヒ、天福元年(西曆一二三三)ニハ夷狄ノ入京ニ原因スト傳ヘタリ。降ツテ徳川時代ニ入り享保十五年(西曆一七三〇)疫邪流行ハ異國ヨリ先ヅ長崎ニ渡リ然ル後蔓延ヲ來シ同十八年ニ至ルマデ猖獗ヲ極メ大阪三郷ノ如キハ罹患スルモノ三十三萬餘人アリト記セリ。享和二年(西曆一八〇二)ニハ和蘭陀人ヨリ傳ヘシト謂ヒ、或ハ長崎ニ漂流セシアンボンナルモノ之ヲ齎シタリトモ稱シ、或ハ蠻人ヨリ生ゼシトモ云フナド其ノ流行ノ泉源ニ就テハ區々ナレ共異國ヨリ傳播シタルハ爭フベカラザルガ如シ。而シテ九州ヲ席捲シテ北上シ京都ニ入り遂ニ全國ニ蔓延セルモノ、如シ、時人之ヲ「アンボン」風或ハ薩摩風ト稱セリ。次デ天保三年(西曆一八三二)ニ於テハ西歐諸國、亞米利加大陸ニ亘リテ一大「バンデミー」ヲ出現セシ年次ニ相當シ本邦亦琉球人ノ來朝ニヨツテ之ガ侵略ヲ被リタリ。人呼ンデ「琉球風」ト云ヒ南九州ヨリ北奥羽ノ地ニ至ル廣茫六千餘里ノ地僅ニ三ヶ月ニ滿タズシテ衆人同病ニ胃サレタルヲ記シテ風邪ノ靈妙ナル力ニ驚嘆セリト云ヘバ該流行ノ猖獗激甚ナルヲ想像スルニ足ルベシ。

安政元年(西曆一八五四)ニハ「アメリカ」風ト稱シテ米艦ノ横濱沖ニ來航ヲ見ルニ及ビテ初メテ

流行蔓延ヲ見タリト記セリ。其ノ後地方的限局的風邪ノ流行ハアリタルモ瀰蔓性ノ大流行ヲ見タル事ナクシテ明治年代ニ入り一八八九年ニ於ケル彼ノ世界的「バンデミー」ノ遂ニ翌明治二十三年(西曆一八九〇年)横濱港ニ流行ノ徵候ヲ現ハシ暫時ニシテ本邦全土ヲ席捲シ後兩三年間激烈ナル流行ヲ反覆シタル事海外諸邦ノ流行狀態ト一致セリ。

以上ハ本邦ニ於ケル「インフルエンザ」流行ノ源泉ノ海外ニ在リト見做スベキモノナルモ其ノ他大小ノ流行幾多度存在スルアリ。是等ハ何レモ「インフルエンザ」流行ノ週期說ニ重要ナルモノアルヲ以テ海外諸國ニ於ケル流行ノ年次ト對照シテ其ノ主要ナルモノヲ表記セントス(本表ハ日本災異志稿、日本醫學史、日本疾病史、ヒルシユ病理學、小兒科叢書等ヲ參照セルモノトス)。

外國ノ流行年次

本邦ノ流行年次

貞觀四年(西曆八六二年)

一月自去冬末京城及畿内外多患咳逆死者

甚衆(三代實錄)

貞觀五年(八六三)

貞觀七年(八六五)

貞觀十四年(八七二)

正月二十日辛是日京邑咳逆病發死亡者衆人間言物海客來黑土毒氣之令然焉(三代實錄)

延喜二十年(九二〇)
 延長元年(九二三)
 正歷四年(九九三)
 六月今月人民悉咳疫五六月間有咳逆疫日
 本紀畧
 寛弘七年(一〇一〇)
 長和四年(一〇一五)
 久安六年(一一五〇)
 十月二十六日成辰近日咳病峰起貴賤上下
 敢無免者老者多以天亡民庶粗死亡
 近年以來第一咳疫也(本朝世紀)
 安貞二年(一二二八)
 天福元年(一二三三)
 二月十七日壬辰近日咳病世俗稱夷病去比
 夷狄入京萬人翫見云々是極不吉徵也(明月
 記)
 寛元二年(一二四四)
 是近日咳病温氣流布貴賤上下無免之間(吾

妻鏡

文永元年(一二六四)
 元徳元年(一二三九)
 ことしはいかなるにか「シハブキヤミ」はや
 りて人多くうせ給ふ(増鏡)
 正平二十年(一二六五)
 應永十四年(二四〇七)
 弘治二年(一五五六)
 京師小兒愛咳逆而死亡者甚多(雍州府志)
 慶長十九年(一六一四)
 九月畿内近畿風疾流行自是月至冬十月

一四七 佛一
 一四八 佛一
 一四九 佛一
 一五〇 佛一
 一五一 佛一
 一五二 佛一
 一五三 佛一
 一五四 佛一
 一五五 佛一
 一五六 佛一
 一五七 佛一
 一五八 佛一
 一五九 佛一
 一六〇 佛一

歐洲、アフリカ、西印度

一五七 一四七

土耳其、伊太利、瑞西、佛蘭西、和蘭、亞細亞、

逸和蘭、英吉利、瑞典、阿非利加、及、
 北亞米利加、南米、西印度

一六四七
 西班牙、北米
 一六七五—七六

本邦ニ於ケル既往ノ流行

獨逸、埃、匈、國、英、國

一六九三

英吉利、佛蘭西、和蘭

一七〇九

伊太利、佛蘭西、獨逸、白耳義、丁抹

一七二九—一三〇

獨逸、瑞典、英吉利、伊太利

一七三二—一三三

露西亞、瑞典、ポーレン、獨逸、埃、太利、匈、牙、利、英

吉利、瑞、西、佛蘭西、伊太利、愛蘭、西班牙、米國

元祿六年

六七月ノ間大ニ旱シ金石流轉八月ノ初ヨリ俄ニ収斂清蕭ノ令行ハレ暴風霖雨白露忽チ霜ニ變ズ國中ノ諸人一般時疫ニ感ジ云々(牛山方考)

寶永四年(一七〇七)

十二月此程世の人咳嗽うれへすと云ふことあらず(折焚柴の記)

享保元年(一七一六)

享保十五年(一七三〇)

八月下旬より風氣流行致し候これは異國より渡り長崎より流行し來り候由(享保世説)

享保十八年(一七三三)

六月ヨリ七月ニ至リ海内風邪大流行(泰平年表)

夏六月頃ヨリ秋ノ半ニ至リ日本國中一統

一七三七—一三八

英吉利、佛蘭西、北米、西印度

一七四二—一四三

バルチツク海ノ沿岸ニ始マリ獨逸、瑞、西、伊

太利、佛蘭西、和蘭、英、吉、利

一七五七—一五八

佛蘭西、蘇格蘭、北米、西印度

一七六一—一六二

北米、西印度、獨逸、匈、牙、利、伊太利、佛蘭西、英、吉

一六六七

獨逸、佛蘭西、伊太利、英吉利、西班牙、北米

一七八一—一八三

本邦ニ於ケル既往ノ流行

本邦ニ於ケル既往ノ流行

ニ疫病流行シテ大阪三郷ノ市中ニシテコヘ風ヲ煩フモノ三十三萬七千四百十五人ト點檢セシトカヤ(成形圖説)

丑七月十日前後ヨリ江戸町中、其後國々在々迄風邪ハヤリ云々(一語一言)

延享元年(一七四四)

六月中旬ヨリ七八月ノ頃マデ諸國大ニ風病ハヤル萬人ノ内九千九百人ニ及ブ(我衣)

明和六年(一七六九)

全國ニ大流行
家毎ニ病マザルモノナク人多ク死シ次第ニ流行シテ佐渡、越後ニ及ブト云フ(稻葉風)

天明四年(一七八四)

著シキ大流行ヲ起セリ。支那、印度ニ始マリ
西比利亞、露西亞、波蘭、獨逸、丁抹、瑞典、英吉利
蘇格蘭、和蘭、佛蘭西、伊太利、西班牙

一七八八—八九

露西亞、獨逸、埃匈國、丁抹、英吉利、佛蘭西、伊太
利

一七九九—一八〇〇

一八〇〇—一八〇三

露西亞ニ始マリ、ポーレン、獨逸、佛蘭西、丁抹、
英吉利、瑞西

一八〇五—一六

一八〇七

西印度、西班牙、露西亞、獨逸、佛蘭西、英吉利、北

米

一八二七

北米、露西亞、西伯利亞

一八三〇—一三三

支那ヨリ印度、南洋諸島、露西亞ヨリ全歐羅
巴ニ及ブ

四月諸國饑饉時疫行ハレテ人多ク死ス。風
邪大ニ流行ス。谷風ト稱ス。(武江年表)

享和二年(一八〇二)

享和元年極月ヨリ二年ノ正月ニ及ビ長崎
ニ疫邪流行ス。(中畧)

阿蘭陀人ヨリ傳ヘシトモ又去年漂流セシ
「アンボン」其ノ外蠻人ヨリ生ゼシ共云フ(中畧)
此邪長崎ヨリ九州ヲ經テ遂ニ上方ニ及ビ
世間一逼ニナリ云々薩摩風又ハ御七風ト
云フ(關田次筆)

文政四年(一八二二)

二月中旬ヨリ都下寒胃流行シ闔家悉ク枕
ニ就クニ至リ西國ニテハ去冬ヨリ掛ケテ
邪氣盛ニシテ久解セサルモノアリト(時還
讀我書)

此邪ハ京攝ヨリ東ハ安房、上總、西南甲斐、伊
豆、北ハ信濃、越後マテモ流行ス。(曲亭雜記)

文政十年(一八二七)

五月此頃都下一般ニ風邪流行シテ其ノ患
ニ罹ラサルモノナシ云々(甲子夜話)

天保二年(一八三一)

寒胃大ニ流行ス

天保三年(一八三二)

冬風邪流行(中畧)此ノ年琉球人來朝セシ故
ニ琉球風ト云フ(武江年表)

西國ハ九月下旬ヨリ始マリ與羽ハ霜月下
旬ニ行ハレタリト綿在六十餘里ノ地僅カ

三ヶ月ニ滿タズシテ衆人同病ニカ、ラザルハナシ(時還讀我書)

一八三六―三七

濠洲、ジャバ、南アフリカ、後印度、露西亞、ヨリ

歐洲

嘉永三年(一八五〇)

十二月末風邪流行春ニ至ル(武江年表)

安政元年(一八五四)

正月ヨリ二月ニ至リ風邪大ニ都下ニ流行ス其正月米夷横濱沖ニ至リシ節故アネリカ風ト稱ス(疫邪流行年譜)

一八五二―五六

世界各地

一八五七―五八

世界各地

一八八九―九〇

世界各地大流行

一八九一―九二

世界各地大流行

一九一八―一九

安政四年(一八五七)

二月風邪大ニ流行ス

明治二十三年(一八九〇)

日本各地大流行

大正七―八年―九年

一九一九―二〇
世界各地大流行

日本各地大流行

第四章 神奈川縣ニ於ケル既往ノ流行

横濱港ノ開港ハ海外ニ於ケル豊富ナル物資ノ供給地トナリ、歐米ノ深遠ナル科學的文化ノ輸入地ト化シテ、我が日本ノ啓發ニ資スル所計リ知ルベカラザルモノアリト雖モ、他面ニ於テ是レニ随伴スル傳染病原ノ輸入地トモナレリ。「ペスト」「コレラ」ノ病原ハ更ナリ茲ニ記載セントスル「インフルエンザ」ノ如キモ通商關係ニ伴フテ輸入傳播セラレタル副産物タルノ觀アリ。

由來本邦ニ於ケル「インフルエンザ」流行ノ跡ヲ觀ルニ前章詳述スルガ如ク關西地方ニ泉源シテ漸次關東ニ蔓延スルヲ常トシ殊ニ其ノ海外ヨリ傳ヘタリト見做スベキ數多ノ流行ニ於テハ九州ノ地ヲ根據トシ或ハ長崎ニ、或ハ琉球、薩摩ニソノ源ヲ發セザルハナシ。是レ當時我が國ノ海外貿易ノ中心地ハ九州ノ地ニ存セルヲ以テ、異國トノ交通關係上長崎地方ニ其ノ初發ヲ見ル敢テ怪ムニ足ラザルベシ。

今神奈川縣ニ於ケル流行性感胃發生ノ記録ヲ辿ルニ、安政元年(嘉永七年(西曆一八五四年))正月米艦東京灣ニ來リ神奈川驛前面ノ海岸ニ停泊シテ徳川幕府ニ通商ヲ求ム。當時「ミスシツビ」(號乗組ノ水夫一人死亡セルアリテ、提督ベルリハ小區域ノ墓地ヲ供給アラシメトテ請ヒ物議ヲ起シ漸クニシテ横濱村ニ葬リタル事跡アリ。該水夫ノ如何ナル疾病ニヨリテ死亡セルモノナルヤハ詳ナラザレ共其ノ後本邦ニ感冒ノ大ニ流行ヲ來シタルニヨリ俗ニ之ヲ「アメリカ風」ト稱スルニ至リタルモ

神奈川縣ニ於ケル既往ノ流行



ノニシテ、然カモ當時ノ海外諸國ニ於テ「インフルエンザ」ノ猖獗ナルモノアリタルヲ以テ觀レバ、コレガ傳播ノ異國船トノ通商關係ニアルヲ暗示スルモノト謂フベシ。而シテ是レ神奈川縣ニ同症ノ流行ヲ見タル記録ノ初メナリトス。

明治二十二年（一八八九）ヨリ二十三年ニ亘リ歐洲ニ於ケル「インフルエンザ」流行ノ猖獗ヲ報ズルモノ頻々タルヨリ、本邦ニ於テモ醫學者ハ之ガ侵入ヲ未然ニ防止セントシテ夫々注意スル所アリト雖モ、當時我が國ニ於テハ「インフルエンザ」ノ何タルヤヲ知ラザルモノ多キヲ以テ、コレガ症狀療法ノ説明ニ過ギザルノ憾ミアリタルガ如ク、豫防法トシテ單ニ一般衛生状態ニ關スル注意ト「キニーネ」ノ内服ヲ推奨スルモノアルニ過ギズシテ何等ノ積極的豫防法ヲ講ズル事能ハザリシ状態ニ在リタリ。斯ル間ニ明治二十三年二月五日、横濱市發行「シヤパンガゼット」紙ハ俄然トシテ横濱外國人居留地内ニ二十餘名ノ「インフルエンザ」症ノ顯レタルヲ報ゼリ。是レ本邦ニ於ケル「パンデミー」ノ先驅タリ。而シテ漸次内地人ニ蔓延ノ徵アルニヨリ、縣當局ハ豫防法ノ論告ヲ分チ又縣令ヲ以テ主治醫ニ報告ノ手續ヲ規定スル等、百方豫防ニ注意スル所アリタルモ遂ニ全縣下ニ瀰漫シ五月頃ニ至リテ一時閉塞シ、同年十月十一月ノ候ニ再ビ流行ヲ來シ、病性春期ニ比シ極メテ不良ニシテ合併症ヲ伴ヒ死亡者ノ増加ヲ示セリ。年末ヨリ翌二十四年ニ入りテ益々猖獗シ、横濱市ノ如キハ殆ンド患者ナキノ家ナク甚ダシキハ一家枕ヲ並ベテ呻吟スルモノアルニ至レリ。而シテ當時報告ニ接シタル患者ノ數ハ僅カニ八千六百餘人ニ止ルモ、其ノ報告ニ漏レタル實際ノ數ニ至ツテハ蓋シ其ノ幾倍ナルヤヲ知ルベカラザリシト謂フ。カクシテ二十四年ニ至リテ終熄シ爾來大正七年ニ至ル迄大流行ヲ見ザルモノトス。

明治二十三年二月當時ノ神奈川縣衛生顧問タルドクトル、エルトリツチ氏ガ「インフルエンザ」ノ原因、症狀治療、豫防等ニ關シ詳細ナル記述ヲ爲シテ注意ヲ促ストコロアリタルニヨリ、縣當局ハ之ヲ縣下ノ醫師ニ配布シテ參考ニ供シタル一文ヲ得タリ。今日ヨリ之ヲ見レバ病原論ノ如キ又室内消毒法ノ如キ、幼稚ニシテ且ツ危険ナルモノアリト雖モ、「インフルエンザ」ニ對スル當時ノ觀念ヲ追想スル緣トモナリ、又神奈川縣トシテ歴史的興味ヲ惹クコト大ナルモノアレバ、之ガ全文ヲ掲載スベシ。

流行性感胃症

神奈川縣衛生顧問

ドクトル エルドリツチ述

通稱「インフルエンザ」流行性感胃ト稱シ佛語ニテ「ラ、グリツプ」ト名ツクル流行病ハ若干週間内ニ大約歐米各國ニ傳播シ今ヤ將ニ日本國ニモ發生セントス
抑モ此流行性感胃ハ其ノ傳染ノ模様他病ノ傳染ノ模様ト異リ而シテ此症ノ傳播ノ迅速ナル大洋ヲ隔テ、衆人一時ニ之ニ感染スル所以ハ蓋シ大氣ニ依テ其ノ病毒ヲ傳搬スルニヨルモノナラン此ノ流行性感胃ノ徵候ハ其ノ發病ノ初期並ニ其ノ輕症ナルモノハ一般感冒ノ烈シキモノト異ナルコトナシ若シ同病ニ感ズル時ハ往々發病ノ二三時前ヨリ少シク不快ヲ覺フルコトアリト雖モ多クハ突然發病スルモノナリ而シテ患者ノ大半ハ或ハ多少ノ惡寒ヲ覺ヘ亦時トシテハ再三反覆シ次テ体温速カニ高昇シ四十度ニ達スルコトアリ且ツ前頭部ニ頭痛

ヲ感シ時トシテハ前頭部並ニ其ノ近傍ノ皮膚ニ痛ミヲ感ジ又扁桃腺咽喉鼻道ニ「カタル」ヲ起シ赤色腫起ヲ顯ハシ乾燥シテ不快ヲ覺フ又一且本病ニ罹リタル時ハ刺激性ノ咳嗽ヲ遺シ經久治セザルコトアリ又呼吸ニ一種ノ困難ヲ發シ聽胸法又ハ打診法ヲ用フルモ較著ノ應候ヲ發見スルコト能ハズ此ノ呼吸困難ハ或ハ間歇アリテ多少整然タル時間ヲ隔テ、發シ而シテ其間歇中ハ患者ノ呼吸平素ニ異ナルコトナシ發病ニ亞テ速カニ氣管支炎ノ普通徵候ヲ呈ス但シ患者ノ模様ニ依リ或ハ激シク或ハ極メテ寛ナリ鼻液出テ粘痰ヲ吐シ時トジテハ血液ヲ混ズルコトアリ又胸部ニ疼痛ヲ覺ユ赤色ヲ呈シ或ハ時々肋膜炎ニ發スル如キ劇痛ヲ感ズルコトアリ眼球ハ赤ク水氣ヲ帶ビ且ツ痛楚ヲ感ジ四肢背部ニ疼痛ヲ覺ヘ多クハ前胸部ニ於テ時々猛烈ナル劇痛ヲ感ズルコトアリ又小便ノ分泌大ニ減少シ或ハ一時尿閉スルコトアリ且ツ尿色極メテ濃厚ニ濁濁シ中ニ澱渣充滿ス而シテ此症ノ分利期ニ向フ時ハ發汗又ハ下痢ノ作用ニ均シク多量ノ尿利アリテ分利スルモノナリ脈搏ハ患者ニ依テ異同アリ先ヅ平脈ヨリモ多數ニシテ九十乃至一百搏トス又少ク微弱不整トナルコトアリ但シ脈搏ノ模様ハ時々變動アリテ一定セズ消化器ノ粘液膜モ亦該病ノ爲メニ多少侵サル、コトアリト雖モ呼吸器ノ如ク甚シカラズ食慾減却舌苔乾燥不快ノ味ヲ覺ヘ上腹部ニ觸ルレバ壓痛等ノ諸症ヲ呈ス該病ニ襲ハル、時ハ初期又ハ經過中時トシテハ嘔吐ヲ發シ胸痛下痢スルコト屢々之レアリ而シテ此下痢ハ爾後ニ赤痢狀トナリ或ハ秘結スル者アリ皮膚ハ初メ灼熱乾燥時トシテ發汗シ末期ニ及ンデ屢々酸臭ヲ放ツモノアリ「リトマス」紙ヲ以テ之ヲ檢スル時ハ酸性ノ反應ヲ呈ス又時トシテハ蕁麻疹或ハ蓋被疹ノ如キ疹ヲ發シ且ツ眼球ニ赤色ヲ呈シ咽喉痛及發熱ノ如キ

者アルニヨリ該病流行ノ初メニ於テハ麻疹ノ如キ發疹熱ノ初期ト誤診スルコトナキニアラズ流行性感胃ニ罹ル時ハ大ニ神経系ノ不安ヲ起ス是レ此症ノ最モ著大且ツ重要ナル徵候ナリトス此ノ病ニ罹ルヤ速カニ非常ニ衰脱シ精神大ニ鬱憂ヲ感ジ常ニ不眠或ハ之ニ反シテ精神沈衰スルモノアリ又筋惕肉潤ヲ發シ又極メテ激症ノ者ハ指端痙攣シ又振慄ス眩暈ハ稀有ノコトニアラズ精神錯亂又ハ少シク譫語ヲ發スルコトアリ此ノ症ノ經過ハ二日乃至四五日ニシテ稀レニハ二週間ニ及ブモノアリ病熱ノ尤モ烈シキ期ハ第三日ニシテ爾後速カニ病勢衰フルモノナリ然レドモ又前症反覆シ稀ニ流行中再感スルモノアリ此症ニ繼發スル神經衰弱ハ管ニ病中ノミナラズ恢復ノ後チ尙ホ多少胎遺スルモノアリ又此症ニ危險ナル種々ノ續發症アリ即チ耳又ハ結膜等ニ「カタル」ヲ起スモノ之ナリ呼吸器ハ多少ノ慢性喉頭炎氣管支炎又ハ肋膜炎等ヲ遺スコトアリ乍去茲ニ續發症ト稱スル所ノモノハ實際發病ニシテ此流行性感胃ノ流行スル時ハ折々其實例アル如ク容易ナラザル病症即チ肺炎又毛細氣管支炎、肋膜炎ノ如キ難病ヲ續發シ或ハ其他經久スル時ハ耳下腺炎ヲ發シ妊婦ノ如キハ往々墮胎流産ノ誤リカスルコトアリ經閉ノ婦女此ノ病ニ罹ル時ハ他ノ傳染病ニ於ケル如ク時トシテハ經閉ヲ醫スルコトアリ此症ノ死亡比例ハ發生ノ都度異同アリテ一定ナラズ其ノ比例最モ多キモ決シテ百分ノ二以上ヲ超フルコトナク大抵此ノ比例ヨリ少キコト多シ此ノ病ニ罹リ死亡スルモノハ極メテ衰弱セシモノ又ハ老人ニアラザレバ多クハ合併症ノ爲メナリ一旦此症ニ感ズル時ハ他病ニ侵サレ易ク特ニ肺病心臟病及神經過敏症ノモノ重症ニ陥リ易キガ故ニ恢復期ニ際シテハ特ニ注意ヲ要ス

療法

方今此症ノ療法ハ病勢ヲ緩解シ痛苦ヲ除去シ續發症ヲ防止スルニ在リ幸ニシテ該病ハ暫時ニシテ自然恢復期ニ向フヲ常トス此ノ流行性感胃ノ爲メ引起ス所ノ衰弱ハ極メテ甚シキモノナレバ減損療法ハ百方謀マザルヲ得ズ故ニ同患者ニハ專ラ注意シテ滋養物ヲ與ヘ且ツ衝動劑ヲ施スベシ衆說ニヨレバ機那鹽ハ大ニ該病ニ効驗アリトス又或人ノ如キハ機那鹽ヲ前以テ充分ニ使用スル時ハ此病ヲ頓挫スルノ効アリト云ヘリ又新藥中「アンチピリン」「アンチフェン」「エヘブリン」及「ヘエナスチン」十氏乃至十五氏ヲ稱用ス就中丙品ハ奏効最モ著シ然レドモ此藥劑ヲ施用スルニ大ニ注意ヲ要ス奈ントナレバ若シ過量ニ與フル時ハ心臟ヲ衰弱セシメ神經衰弱ヲ來スノ恐レアレバ細心注意シテ適量ヲ與ラベシ余ハ此ノ「アンチピリン」ト規尼涅ノ合劑ヲ用ヒ甚ダ効驗アルコトヲ發見セリ即チ該病ノ初期先ヅ規尼涅十氏ヲ與ヘ數時間ヲ隔テ「アンチピリン」八氏乃至十氏ヲ用ユ又此症ノ初期ニ於テ醫學博士「パーズロー」氏ハ大ニ「アトロピネ」ヲ稱用セリ即チ「アトロピネ」二氏水一弓ノ溶液トナシ大人二八四m乃至五m(即チ百二十分氏ノ一乃至九十六分氏ノ一)七八歳ノ小兒ニハ一m即チ四百八十分氏ノ一ヲ内服セシム但シ二十四時間内ニ二回ヲ超過スベカラズ抑如此有方ノ藥劑ハ用ニ臨ンデ注意ヲ要スベキハ勿論ナレドモ右ノ用量ハ安全ナル適量ナリトス又「ベラドン」ナリ「アトロピネ」ニ換用スルモ亦可ナレ共其効少シ但シ其用量ハ一日二回一m乃至十mトス蓋シ此症ノ初期ニ於ケル劇キ呼吸困難ニ用ヒテ最モ偉効アルモノハ恐ラクハ「アトロピネ」ニ優ルモノアラザルベシ

又同博士ハ日ニ二三回病室内ニ於テ硫黃二三氏ヲ燃ヤシ亞硫酸瓦斯ヲ蒸散セシメ患者咽喉内ニ管道ノ感覺ヲ起スニ至ルヲ度トシ二三分時間吸入セシムルコトヲ稱用セリ又胸部ニ溫罨布ヲ貼シ濕器法ヲ施シ掩フニ油絹油紙又ハ護謨引布等ヲ以テスル時ハ幾分カ呼吸ノ困難ヲ緩解スルノ便アリ咳嗽ニハ通常ノ療法ヲ施シ老人及虛弱ノ者ニハ「セネガ」龍腦安息香安謨尼亞ノ如キ衝動祛痰藥ヲ用ヒテ可ナリ衰弱ノ最モ甚ダシキ時ハ強壯劑又ハ「アルコール」性ノ興奮劑ヲ用フベシ而シテ該病ニ罹ル時ハ病後衰弱甚シキモノナレバ急性ノ症候退クモ尙之ヲ持重セシムルヲ可トス又老人虛弱者ニハ常ニ心臟ニ注意シ若シ衰弱ノ徵候アルヲ察スル時ハ直チニ「アルコール」「デキダリス」斯の列規尼龍腦等ヲ用ユベシ若シ心臟衰弱甚シキ時ハ「アトロピネ」ヲ用フ可シ咽喉乾燥シテ不快ヲ感ズル時ハ鹽劑等ノ含嗽或ハ「コカイン」ノ吸烟法ヲ鼻道咽喉ニ施シテ良効アリ又硼酸ノ如キ無毒ナル防腐劑ヲ稀薄ナル飽和液トナシ用フル時ハ必ズ効驗アルノミナラズ發病ノ初期ニ在テ頓挫ノ効アリ又撒布吹管ヲ用ヒテ沃度仿謨末ノ吹入法ヲ施ス時ハ此ノ期ニ於テ最モ良効アリ若シ疼痛甚シキ時ハ莫菲ノ皮下注入若クハ内服セシムルモ妨ナシ又四肢及背部ニ緩和擦劑ヲ用ユル時ハ大ニ爽快ヲ覺ヘシムルモノトス下痢並ニ胃症ニハ蒼鉛及阿片ノ如キ收斂藥ヲ用ヒ其他一般ノ方法ニ從フ可シ又疝痛アルモノニハ前藥ヲ用ヒ兼テ溫罨布ヲ施ス時ハ効アリ又病室ニ於テ常ニ蒸氣ヲ蒸騰セシムル時ハ他ノ呼吸器病ニ於ケルガ如ク患者ノ爲メ最モ利アリトス而シテ蒸氣ヲ滿ダサントスルニ彼ノ蒸氣ノ罐ヲ用フルヲ便トス此蒸氣罐ナキ時ハ手拭ニ水ヲ注ギ之ヲ火邊ニ置キ又ハ煉瓦ヲ熱シテ水中ニ沈メ以ツテ病室ヲシテ温氣ト濕氣トヲ蒸蒸セシム可シ但其湯中ニ「ユーカリ

プテス油或ハ底列並油或ハ結麗阿曹篤ヲ加フル時ハ室内ノ空氣ニ充分防腐ノ効ヲ奏スルヲ以テ最モ裨益アルモノトス又患者ニハ食慾ナキモミルク、スープ等ノ如キ滋養物ヲ與ヘザルベカラズ蓋シ滋養食物ハ藥劑ヨリモ患者ノ衰弱ヲ防止スルニ缺ク可カラザルモノナリ茲ニ最モ注意スベキハ例令輕症ノモノタリトモ寒氣ニ胃觸セシメ濕氣ニ露出セシメザルコト是ナリ蓋シ恐ル可キハ併發病ヲ起シ易キヲ以テナリ又治愈ノ後ト雖モ一旦此病ニ罹ル時ハ呼吸器ヲ侵シ易キヲ以テ尤モ注意ヲ要ス

若シ日本ニ於テ此症ノ流行甚シキニ至リテハ老人及虛弱ノ者並ニ肺患ニ罹リ易キモノ特ニ氣管支炎、喘息其他呼吸病及心臟病ニ罹ルモノハ可成外出セシメザルヲ要ス蓋シ戸内ニ在ルモノハ戶外ニ在ルモノヨリモ此症ニ感染スルコト少シ是レ從來ノ經驗ニ徴シ明カナルヲ以テナリ

第五章 一九一八年ニ於ケル海外 諸國ノ流行狀態

一八八九—一八九〇年ヨリ數年間ノ世界的流行ノ後今回ノ世界的「パンデミー」ニ至ル二十有餘年ノ間、バイフェル菌性インフルエンザノ流行ヲ見ル事ナク、恰モバイフェル菌ハ地球上ヨリ消滅セシガ如ク全ク其ノ跡ヲ斷チ、吾人ハ只成書ノ記載ニヨリインフルエンザナルモノヲ知ルノ外由ナカリシモノ、俄然一九一八年五月西班牙ノ一角ヨリ峰起シテ流行ノ兆ヲ現ハシ秋期ニ及ンデ疾風迅雷所謂スバニツシユ、インフルエンザノ呼稱ヲ以テ、全地球上人類ノ印跡スル所侵

サマルノ地ナク、其ノ蔓延ノ神速ナル、其ノ慘害ノ及ブ所歐洲大戰五ケ年ニ亘ル慘禍ニモ勝レリト稱セラレタル程ノ猛威ヲ逞ウシ、且進歩ヲ誇ル現代醫學ヲシテ殆ド施ス策ヲ失ハシメタル所ニシテ、過去ニ於ケル邪モ亦靈ナルカナノ嘆ヲ發セシメタルノ觀ナクンバアラズ。

今之ガ流行ノ狀態ヲ述ブルニ當リ初發地ノ關係ヲ知ル事ハ疫學上興味アル問題ナルベシト雖モ時恰モ大戰中ニ屬スルヲ以テ各國何レモ通信ノ檢閲嚴重ヲ極メ又惡疫流行ノ報ヲ傳フル事ノ戰線士氣ニ影響スル事大ナルモノアルベキヲ以テ、交戰國ハ何レモ之ガ報道ヲ禁止セルハ疑フベカラザル所ナリトス。サレバ軍隊内ニ於ケル發生殊ニ獨逸國內ニ於ケル同病ノ蔓延ニ就テハ詳細ヲ知り得ザル所多キヲ遺憾トス。インフルエンザ様疾患ノ尤モ最初ニ報道セラレタルモノハ一九一八年五月二十八日西班牙ワレンシア(Valencia)ニ於テ「グリツペ」ニ類似セル原因不明ナル熱性病ノ發生シ、同國內ニ於ケル其ノ他ノ都市ニ於テモ同症ノ注意スルモノアルヲ報ジタルヲ嚆矢トナスベキカ。然シ又マドリッドヨリ公衆衛生局ニ宛テタル報道ニヨレバ、五月ノ下旬ニ最初マドリッド市ノミニ流行ノ猖獗ナルヲ報ジ、附言シテ該病ノ性質上急速ニ他ノ地方ニ蔓延スベシト謂ヘルヲ見レバ、或ハマドリッド市ガ初發ナルヤモ知ルベカラザルモ、要スルニ西班牙ニ於テ五月下旬ヨリ流行ノ徵候ヲ現ハセル事ハ事實ナルガ如シ、世ニ之レヲ「スバニツシユ、インフルエンザ」ト稱スルハ蓋シ本病ノ泉源ヲ西班牙ニ求メタルニヨル。然ルニ西班牙ニ於テハ之ヲ否定シ獨逸潜水艇ノ同國ノ港ニ寄港セルニ端ヲ發シタリト辨ゼリ。恰モ一八三〇年ニ於ケル世界的流行ノロシヤニ於テコレガ由來ヲ支那ニ歸セシニ髣髴タリ。

更ニ之ヲ壁島軍醫中佐ノ海軍省ニ致セル報告ヲ見ルニ「西部戰線ノ白耳義軍ニ於テハ、五月五

日ヨリ九日間ハ互ニ相隔絶セル場所ニ患者ヲ發生セルニ過ギザリシモ、五月ノ下旬ニ及ンデ全軍ニ蔓延シ患者六千人ヲ算セリ。又英軍ニ於テハ四月中患者ノ發生寥寥タリシモ五月、六月ニ於テ全軍ニ波及シ英本國ニ於テモ多數ノ患者ヲ發生セリ。

佛軍ニ於テハ五月初旬一部ニ發生ノ兆アルニ過ギザリシニ、數週ナラズシテ總テノ聯隊ニ傳播シ、其ノ罹病率多クハ一〇%ヲ越ヘザリシモ時ニ五十乃至七十五%ニ達セルモノアリ、殊ニ流行ノ初期安南人勞働者ノ之ニ冒サル、モノ多カリキ。在佛米軍又五月下旬マデニ其ノ二十七%ノ罹病者ヲ出シ、或ル隊ニアリテハ之ニ冒サレタルモノ實ニ其ノ八十%ニ達セリト云フ。

伊太利軍ニ於ケル流行狀況ハ初メ第一軍ニ限局セルガ如カリシモ忽チニシテ全軍及民間ニ波及シ、或ル隊ノ如キハ日々千二百ノ患者ヲ發生シ以テ六月末日迄ニ無慮八萬有餘ノ患者ヲ數フルニ至リス。又同國海軍ニ於テハ五月初旬急ニ多數ノ艦船ニ現ハレ日ナラズシテ數百ノ患者ヲ出セリト謂ハル云々」下記シ又五月二十四日發ノ倫敦特電ニ「獨軍内ニ暴動起レリトノ風説ハ事實ナル事ヲ確メラレタリ、而シテ醫學社會ニ於テハ獨逸軍隊内ニ猛烈ナルインフルエンザノ蔓延シツツアル事實ヲ摘發セリ」ト報ズルヲ見レバ、交戰諸國ノ軍隊内ニ於テハ既ニ四月中ニ發生シテ病勢猖獗ヲ極メタルヲ窺知シ得ベク、西班牙ニ於ケル初發ノ報ニ先キ立ツ事約一ヶ月以前ニ在ルモノ、如ク觀察セラル。

斯ノ如ク交戰諸國軍隊内ニ蔓延猖獗ヲ極メタル處ナレバ軍隊ノ交送、歸還兵ノ輸送等ニヨリテ戰線ヨリ本國ニ病毒ヲ傳播セシムルハ怪ムニ足ラザルベク、又戰艦ノ寄港、乗組員ノ上陸等ニヨリテ病毒ヲ齎サレタルコトモ想像セラルベク、西班牙ノ該病流行ノ泉源ヲ獨逸ニ歸セル蓋シ

故ナキニアラザルベシ。

然シテ當初ニ於ケル同症ノ特色ハ西班牙ノ報告書ヲ轉載セル米國公衆衛生報告書ニ見ルニ(一)傳播力ノ急速ナル(二)病勢ノ比較的良性ニシテ「カタール」型及「ロイマチス」型ノ二種アル事(三)五歲以下ノ小兒及老人ニ罹病率少ナキ事等ヲ擧ゲタリ。

又「ルーター」通信ニヨリテ西班牙國內ニ於ケル流行状態ヲ案ズルニ、上ハ國王ヨリ内閣員ヲ冒シ下ハ全西班牙國民ノ三割ハ「インフルエンザ」ニ感染セリト報ジ、首都マドリッド市ノ如キハ劇場ノ閉鎖トナリ、市内電車モ亦同様ノ原因ニヨリテ少カラズ故障ヲ生ジツ、アリト云ヘバ、當時如何ニ猖獗ヲ極メタルカヲ想像スルニ足ルベシ。

斯クシテ一九一八年六月ニ及ンデ世界ノ遠隔セル三ヶ所ヨリ流行ヲ報ゼリ。然レドモコレ西班牙ニ端ヲ發セルモノト同一系統ナルヤ否ハ詳ナラズ、即チ(一)所謂西班牙系ニシテ英蘭及瑞西ノ大都市ニ出現セルモノ(二)印度ボンベイ市ニ爆發セルモノ(三)南米ブラジル、サントスニ於テ流行シツツアリトノ報告ニ接セルモノトス。

七月ニ入り歐洲ニ於テハ英國、瑞西、佛蘭西ノ各都市ヲ冒シ漸次地方ニ蔓延シツ、アリタリ。東洋方面ニ於テハ印度ニ流行ノ擴大ヲ示シ、又支那四川省重慶ニ發シ市民ノ半數ヲ冒セルヲ報ジタリ。

八月ニハ遠ク亞米利加大陸ニ出現シ西印度諸島ヲ冒シ八月二十八日合衆國ボストン市ニ爆發セルヲ報ゼリ。コレ合衆國ニ於ケル初發ト見ルベク須臾ニシテマサチューセツツ全洲ニ及ビタリ。

九月ニハデンマルク、ポルトガル、伊太利ヨリ一方バルカン半島ニ入りテ全歐洲ヲ席捲シ更ニ
 アフリカニ入り北アフリカ地方地中海沿岸ノ諸邦及南阿聯邦ヲ冒スニ至レリ。
 亞米利加ニ於テハ加奈太、メキシコ、中央アメリカノ諸國ニ侵入シ、合衆國ニ於テハ大西洋海岸ノ
 諸洲ヨリ西方ヘト蔓延シ幾モナク四十三洲ヲ風靡スルニ至レリ。
 東洋ニ在テハ支那、朝鮮地方ニ於テモ上海、京城、釜山、鎮南浦等ノ都市ヲ襲ヒツ、アリタリ。
 十月十一月ニ入りテ濠洲、南洋諸島ニ蔓延ヲ見ルニ及ンデ地球上殆ンドソノ流行ヲ見ザル
 ノ地ナク、病勢ノ猛烈ナル蔓延ノ急速ナル一八九九年ニ於ケル「バンデミ」ノ遠ク及ブトコロニ
 アラザルナリ、ヒルシユ氏ガ往時斯ル状態ヲ記シテ「世界一撃ノ下ニアリ」ト謂ヘル蓋シ至言ナリ
 ト謂フベシ。

左ニ英米ノ醫事雜誌數種ヲ參照シテ世界各地ニ於ケル「インフルエンザ」蔓延ノ狀況ヲ畧記ス
 ベシ。

一九一八年世界各地ニ於ケル「インフルエンザ」發生ノ概況

地名又ハ國名	報告月日	流行地及ビ流行ノ概況
五月ニ於ケル流行		
歐洲		
西班牙	五月二十八日	ワレンシア (Valencia) 及ビマドリット市ニ於テ原因不明ナル熱性病ニシテ「インフルエンザ」類似ノ疾患ノ流行シツ、アルヲ報ズ。

六月ニ於ケル流行

歐洲		
瑞 士	西 一 日	チーリツヒ市ニ流行シツ、アルヲ報ズ。
英 蘭	土 十 五 日	バーミンガム市及ビ他ノ地方ニ發生ス。
南アメリカ		
ブラジル	十 六 日	サントス (Santos) ニ流行ヲ報ズ。
東洋方面		
印 度	二 十 二 日	ボンベイニ流行ス。メソボタミヤヨリ寄港セル船舶ニ由來スト稱ス。

七月ニ於ケル流行

歐洲		
ネザールランド		流行猖獗ヲ極ム。
瑞 士	威 十 三 日	クリスチアニアニ流行ス。
瑞 典	十 三 日	マルモ (Malmö) 及ビヨーランフルグニ發生ノ報アリ。
瑞 西		七月末ニ至リベルン、センドゴールニ猖獗ヲ極メ全國ヲ席捲シツ、アリ。
アフリカ		
アルゼリア		七月中流行ス。
東洋方面		

印度 那 二十七日 四川省重慶府ニ流行シ市民ノ半数之ガ爲メニ冒サル。

八月ニ於ケル流行

歐洲

瑞典 十月十日 ストックホルムニ發生ス。

希臘 十月十八日 ナロニカ及ビカラマタニ流行シツ、アルヲ報ズ。

アメリカ

合衆國 廿八日 ボストン及ビ同市附近ニ於テインフルエンザノ發生ヲ報ジ患者既ニ千四百餘名ニ及ブ。

九月ニ於ケル流行

歐洲

丁抹 全國ニ亘リテ九月中流行ヲ極ム。

佛蘭西 佛蘭西、パリ、マルセイユ、及ビナント

諸威 等ノ諸都市ニ流行ス。

伊太利 威 トロンゼム(Tondjem)ニ流行ス。

西班牙 全 國ニ蔓延ス、

西班牙 二十七日

アリ。

南アフリカ大陸 三十日

リスボンニ流行激甚ナリ。

南アフリカ聯邦 十四日

チニス市ニ流行ヲ見ル。

シムラ、レオン 二十三日

ダルバン(Durban)ニ初發患者ノ發生アリ。

セネガール 二十三日

ランドアレア(Rand Area)ニ流行ス。

モロツコ 二十八日

ケーンタウン及ビキンバレーニ流行ヲ報ズ。

北アメリカ大陸 二十一日

フリータウンニ流行ス。

カナダ 二十一日

ダーカー(Dakar)ニ流行ヲ報ズ。

合衆國

合衆國 三十日

タンギール(Tanger)ヨリ流行ノ兆ヲ現ハス。

カナダノ大西洋沿岸ナル

グイクトリアウイユ(Victoria)等ノ諸洲ニ流行ヲ來ス。

キユーベツグ(Quebec)ニ流行ヲ來ス。

ハミルトン(Hamilton)等ノ諸洲ニ流行ヲ來ス。

コンネクチカット及ビマサチューセツツ兩洲ニ爆發シテ

漸次大西洋岸及ビメキシコ灣ニ沿フテ蔓延シ速カニ西方

ノ諸洲ニ波及シテ遂ニ四十三洲及コロンビア地方ニ蔓延

シツ、アルヲ報ジ大平洋岸ナルカリフォルニア、ワシント

メキシコ 中央アメリカ及 南米	サウルパドル	ホンジュラス	ブラジル	西印度諸島	ベルムダ島	ジャマイカ島	東洋方面	朝鮮	支那	十月 月中ノ流行
メキシコ	十一月一日	十一月六日		二十五日	三十日				二十八日	十月 月中ノ流行
中央アメリカ及南米	サンタクルズ(Santa Cruz)ニ流行ス。	サルパトル共和国内ニ流行ス。	アマパラ(Amapala)ニ流行ス。	バビイヤ(Bahia)ニ流行ス。	首都ベルムダニ流行ヲ報ズ。	ルーセイヤ(Lucea)及ビモンテゴムー(Monteago Bay)ニ發生ス。	鎮南浦釜山京城ニ流行ス。	香港ニ發生ス。		
サウルパドル										
ホンジュラス										
ブラジル										
西印度諸島										
ベルムダ島										
ジャマイカ島										
東洋方面										
朝鮮										
支那										
十月 月中ノ流行										
歐洲										
佛蘭西										
露西亞										
亞										
一 日										

ンノ兩洲ニモ發生シベルウエドルサンガブリーロスア
ンゼル等ニ流行ヲ見ルニ至レリ。
サンタクルズ(Santa Cruz)ニ流行ス。
サルパトル共和国内ニ流行ス。
アマパラ(Amapala)ニ流行ス。
バビイヤ(Bahia)ニ流行ス。
首都ベルムダニ流行ヲ報ズ。
ルーセイヤ(Lucea)及ビモンテゴムー(Monteago Bay)ニ發生ス。
鎮南浦釜山京城ニ流行ス。
香港ニ發生ス。
リヨン市ニ流行猖獗ヲ極ム。
セントエチエヌ(St Etienne)ニ流行ス。
アルチャンゼン市(Archangel City)ニ流行ス。

伊太利	希臘	アフリカ	リベリア	北アメリカ	メキシコ	合衆國
伊太利	二十五日		五日			
希臘						
アフリカ						
リベリア						
北アメリカ						
メキシコ						
合衆國						

レヴォルン Leghorn 及ビメッシーナ(Messina)ノ軍隊間ニ流行シツ
、アルヲ報ズ。
パトラス(Patras)ニ流行ス。
リベリア(Liberia)ニ於テアフリカ大陸ノ各港ヲ出帆スル船
船ニ對シテ海港檢疫ヲ施行ス。
五日ヨリ二十一日ニ至ル報告ニ據レバアグジイタ(Agujita
チナン(Chihuahua)ゴードラン(Piedras)ネグラス(Negras)サビ
ナ(Sabina)マタモロス(Matamoros)ニ流行ノ兆ヲ現ハシ急速ニ
全國ニ傳播セリ。
流行性感冒ハ十月ニ入りテ隔離的ナル村落及ビ山間ノ地
域ヲ除キテハ既ニ合衆國全般ニ傳播セリ。而シテ十月十五
日頃ニハ大西洋沿岸ノ各都市ニ病勢猖獗ヲ極メ、又内地ノ
各都市ニ波及シ十月下旬ニハ全洲ノ大都市ヲ席捲スルニ
至レリ。又合衆國ノ中央及ビ太平洋沿岸ノ村落ニ於テハ十
月下旬既ニ流行ノ高潮期ニ達セリ。